

## 小学校家庭科における商品選択の観点を実感し理解する授業

A lesson for making smart purchase decisions through simulation at elementary school

山下綾子\*  
Ayako YAMASHITA

重川純子\*\*  
Junko SHIGEKAWA

【キーワード】購買行動 意思決定 選択基準 消費者教育 メタ認知

### 1 はじめに

何を購入し、どのように用いるかは、ひとり一人の生活のあり方だけでなく、社会のあり方にも影響を与える。2012年に制定された消費者教育推進法では、消費者が自らの行動が現在だけでなく将来にわたり、広く影響を及ぼすことを自覚し、持続可能な社会に向け積極的に参画するような消費者市民の育成が掲げられている。また、2015年の国連持続可能な開発サミットでは「我々の世界を変革する：持続可能な開発のための2030アジェンダ」が採択され、「国連による持続可能な開発目標（SDGs）」として示される17項目の中に目標12として消費のあり方を取り上げている「持続可能な消費と生産のパターンの確保」が含まれている。

小学校の家庭科では、昭和22年度の家庭科編（試案）以降、平成29年3月公示の学習指導要領まで一貫して学習内容の中に買物が取り上げられてきている。消費者教育の一翼を担ってきた家庭科において、子どもたちに消費者としての知識や技能自ら考える力を育成するための教材や指導方法の一層の検討が求められている。小学校における買物の学習について、これまでも多くの実践が積み重ねられている。具体的には、模擬買物体験をするもの、例えばキャベツを買う学習を教室で行う実践（埼玉県教育委員会、2011）、実際に買物体験をするもの、例えば修学旅行で買うお土産の計画を立て実際にそれを購入するという実践（埼玉県教育委員会、2010）や、調理実習の材料を児童が考え実際に学校近くの商店に買いに行くという実践（山下・河村、2014）などがある。これらの実践では「買う」という行為を経験するが、児童自身が商品そのものや品質を十分に吟味する実践ではないことも少なくない。

本稿では、児童自身が品質を吟味可能な商品を題材に取り上げ、児童が商品選択の基礎的・基本的な知識を習得し、自分にとって必要な品質や観点を考え、自分の価値観に基づいて選択することができるように学習指導を検討した。授業実践を通じた児童の変容の姿を明らかにすることとした。

### 2 購買行動の学習

#### （1）購買行動

購買行動の意思決定においては、買いたいという欲求を認識し、欲求に基づいた情報探索を行い、選択肢を評価して買うことになる。日常生活の中では、ある特定のことを欲するより、ある目的を果たすものを欲することが多く、後者の場合にはその目的を果たす複数のものから何を購入するか意思決定している。ここでは、商品に関する情報と購入者自身に関する情報が用いられる。平成20年、平成29年の小学校家庭科の学習指導要領解説の買物の学習内容には、情報を収集し、整理できるようにすることが含まれ、選択の観点として、目的にあった品質、価格、分量（ただし、分量は平成29年のみ）が例示されている。自分自身の情報については明示されていないが、「目的にあった」を考えるためには購入者の使用目的を確認することが求められ、その他、使用できる金銭や現用品、好みなど購入者の情報が不可欠である。

購入者がそれぞれの観点をどの程度重視しているかが最終決定につながる。商品の観点的客観的な状況が同じでも、場面（目的）や好み、価値観により選択結果は異なる。購買行動の学習では、目的を確認し、情報を収集し読み取り、観点到重み付け（評価）が行われていることを意識化し、実行できるようにすることが必要といえる。

#### （2）購買行動小学校での教材

商品選択の学習は衣食住のほかの領域と関連させながら行われることも少なくない。調理実習で用いる食品の場合には、鮮度や必要量から商品選択を行うことになり、品質を鮮度でとらえている。取り上げるべき学習内容には表示の読み取りも含まれており、消費期限が示されていれば、その情報をもとに判断することになる。地産地消の点などから産地の情報が活用される場合もある。

本研究では、すべての児童が自分の経験から商品を多面的に吟味できるものとして文房具を取り上げること

\* 狭山市立狭山台小学校

\*\* 埼玉大学教育学部生活創造講座

とした。授業時間内に試すことができ、機能に幅があって違いがとらえやすい、児童が普段扱うであろうお金の範囲内で価格にも幅があり、環境配慮を観点に含めることが可能、さらに現物を用意しやすい商品として消しゴムを取り上げることにした。特徴の異なる3種類の消しゴムを班ごとに1つずつ準備した。1つ目(A)は角がたくさんある形状、白色で価格は150円、2つ目(B)はエコマークがパッケージについていて他より小さめであり、白色で価格は80円、3つ目(C)は児童がよく知っているキャラクターの形をしたもので細長く茶色いもので価格は120円である(価格は、実売価格と近似したわかりやすい値を設定した)。消しゴムの場合、鉛筆文字が消える程度が品質になるが、3種類の消しゴムの消える程度については、いずれも一定以上のレベルである。

### 3 授業の実践

#### (1) 対象者

本稿では、2つの実践から児童の変容の姿を示すこととした。1つめの実践は、2016年2月に公立小学校の第5学年の全学級である2学級(76名)に実施したものである。以下この実践を実践1とする。2つめの実践は、実践1の課題を改善し、2017年2月に同小学校の第5学年の全学級である2学級(68名)に実施したものである。以下この実践を実践2とする。いずれの実践も実施した授業内容は、次に示す流れで行った。

#### (2) 授業の流れ

商品選択の授業は、小学校第5学年を対象に題材名「じょうずに使おうものやお金」(4時間扱い)の中の、第3時「物を選んで買う時、情報をどのように活用したらいいのだろう」として実施した。第3時の目的は「品質を考えた物の選び方について理解し、ものを買うための情報を集め読み解くことができる。」とした。4時間の内容構成の概要は重川・山下(2017)に示している。

学習過程は主に3つから成る。学習過程①となる導入では、第1・2時で学習したことを児童が振り返るような発問・応答をしながら、有限であるお金を上手に使うことが必要であることを共通理解できるようにした。続いて、児童の買物の経験を尋ね、その経験と関連させて本時のめあて「同じようなものがある時、どうしたらじょうずな買物ができるだろう」を提示した。めあては、日常生活において物を買う時に、同じような特性を備えた複数の種類の商品(例えば、本時の例では消しゴム)の中から1つを選ぶという場面を想定し、具体的に本時の学習を生活に活かせるようにと設定した。

学習過程②となる展開では、買物をする時の手順として「目的を確かめる→情報を集める→比べて考える→決める」を教師が示した。そして本時における買物の目的「学習で使うための消しゴムを買う」をクラス全体で確認した。価格情報のみ教師が示し、それ以外の情報は児童が実物を見ながら探索した。また、品質に

関する情報を児童が実感しながら得ることができるようにするため、それぞれの消しゴムの消し具合を試すことができるようにした。消しゴムの消え具合はいずれも一定以上であったが、持ち方や使い方により、各自が消えやすさの違いを実感していた。児童は読み取った、あるいは体験的に判断した情報を、長所と短所に分けてワークシートに記入した。

児童による消しゴムごとの長所・短所を発表してもらい、長所としてあげられた事項は青い文字で、短所としてあげられた事項は赤い文字で短冊に教師が記入し、黒板に貼った。教師が、長所、短所あわせてこれらの事項を仲間分けしてみようと提案し、児童の発言に沿って教師が短冊を移動させグループを作った。グループに合う名前を児童と考え、「値段」「量」「好み」「環境」「消しやすさ」「持ちやすさ」などの名前がついた。日常生活で使っているこれらの語が商品選択の観点となること、さらによく消えることや「消しやすさ」が消しゴムの「品質」、角が多いことや「持ちやすさ」は「機能」と呼ばれることを板書で確認した。その後児童は、黒板で整理した品質に関する情報と自分で読み取った情報をもとにして、自分に必要な観点を考え、買う消しゴムを決定し、その理由をワークシートに記入した。

学習過程③となるまとめでは、児童が選んだものとその理由を聞き合った。Aの消しゴムを選んだ児童は「角があつて細かい所や軽く力を入れただけで消えるし、大きいほうだから長く使えるから」、Bの消しゴムを選んだ児童は「環境にいいしコンパクトで使いやすく持ち運びに便利で値段もやすいから」、Cを選んだ児童は「少し高いけど消しやすしいし長く使えるしかわいい。かさばるけど多少は平気」といった発表があり、必要な観点はそれを選ぶ人によって異なること、そしてその背景にはその人が何を大切にしたいかが関わっていること、それを「価値観」ということを確認した。

### 4 児童の変容

#### (1) 実践1による児童の変容

児童の商品選択に対する意識と知識の2点から、変容をとらえた。

##### ①商品選択に対する意識の変容

「値段が高いものほど、よいものだと思う」「買物する時は値段が決めてだと思ふ」という質問に対し「そう思う」「ややそう思う」「あまりそう思わない」「そう思わない」の4件法で回答を求めた。

学習前後の児童の消費に対する意識の変容を図1・2に示した。「値段が高いものほど、よいものだと思う」については、「そう思う」「ややそう思う」と回答する人数に変化は見られなかったが、「あまりそう思わない」と回答した児童は少なくなり「そう思わない」と回答する児童が約2倍に増えた。「買物する時は値段が決めてだと思ふ」については、「そう思う」「ややそう思う」と回答する人数は減り、「そう思わない」とする人数が増えた。学習によって、

価格と品質の関係について品質は必ずしも値段で決まるものではないと意識が変容し、商品選択の観点は値段だけではないことに気付いた児童が増えたと考えられる。

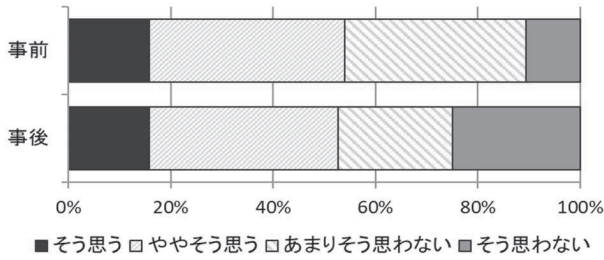


図1 「値段が高いものほど、よいものだと思う」への回答

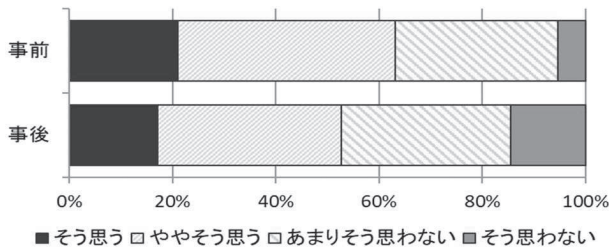


図2 「買い物するときは値段が決め手だと思う」への回答

## ②商品選択に対する知識の変容

児童の商品選択に対する知識の変容は、図3に示す記述式質問紙への記述内容からとらえた。授業で扱ったのは消しゴムであるが、単に消しゴムを選ぶための知識ではなく、そこで獲得した知識が他の商品選択でも活かされるかをとらえることとした。質問内容は、日常生活の中で商品を選択する場面を設定し、児童は選択する商品とそれを選んだ理由を書くというものである。選ぶ商品と場面は、児童の日常生活の中にありそうで無理なく考えることができる設定として、「家に友だちが来るのでリンゴジュースを購入する」という場面を設定した。リンゴジュースは「価格」「賞味期限」「量」「原材料」「形状」などの選択の観点の状況が異なる商品を示すことができ、ここでは4種類の中から選ぶこととした。この調査も学習の前後に同じものを実施し、変容の様子をとらえた。

学習の前後で、選んだ商品が変わった児童は全体の35.5%であった。同じ商品を選んでいる児童が多いが、賞味期限のみの記述であった児童が価格のことも記述したり、1種類のジュースの記述のみであった児童が4種類のジュースの比較を丁寧に記述したりと選択理由に変化がみられた。

「値段が高いものほど、よいものだと思う」、「買う時は値段が決めてだと思ふ」の質問に対し、事前では「そう思う」と回答し、事後では「そう思わない」と意識が大きく変容した児童が2名いた。この児童たちの学習前後の記述式質問紙、学習時ワークシートから学習履歴を図4-1、4-2に示している。A児は、

**こんなときどうする？考えてみよう**

これはテストではありません。あなたが思ったことを書いてください。

5年 組 番 名前( )

明日、あなたの家にお友達が7～8人来ることになりました。準備のために、おうちの人と一緒にお店に買い物にいくと、  
「明日、みんなで飲むリンゴジュースを選んできて。」  
とおうちの人に言われました。だいたい、5リットル分くらいあれば足りるかなと思ってジュース売り場に行くと、次のような4種類のリンゴジュースが売られていました。

	果汁	量	賞味期限	原材料名	ねだん
<b>A</b>	100%	2リットル	2週間後	青森県産りんご	450円
<b>B</b>	20%	2リットル	2週間後	りんご・香料・さとう	200円
<b>C</b>	20%	200ミリリットルで10本セット	1か月後	りんご・香料・さとう	300円
<b>D</b>	100%	2リットル	明日	青森県産りんご	値引きされて200円

あなたは  を選び、おうちの人のところへ持っていきました。すると、おうちの人が「どうして、これを選んだの？」と聞きました。そこで、あなたは次のようにおうちの人に説明しました。

【このジュースを選んだ理由はね・・・】

図3 商品選択についての記述式質問紙

前後の記述いずれにも果汁の割合が含まれている。学習前には、果汁割合が高いAを選択している。学習前には、味のほか、賞味期限<sup>1)</sup>と量を考慮し「飲みきれぬ」と記しており、食品を無駄にしたくないという気持ちが見て取れる。消しゴムの選択の記述では、おそらくエコマークをもとにした「環境」という観点を明示し、「大事につかえば、小さくても長持ちできる」というように使い方の点からも環境配慮がみられる。このほか、「カスがまとまる」といった機能が選択の観点の1つであることを授業を通して習得したと考えられる。学習後も値段に注目して安さの評価が最初にあがる。値段の高さを価値基準に据えず、値段や果汁100%と20%の比較をした結果、選択肢の変化として表れたと考える。

B児は学習前にも、値段と量や原材料、賞味期限を考慮した結果、Dを選択している。値段については、安さに価値をおいていたと考えられる。消しゴムの選択理由では、値段の安さをあげるが、環境を理由の最初にあげている。学習後、環境はB児にとって選択の観点の重視点になっており、余った場合の対応、素材の特徴の点から商品を選択している。選択の観点に環境への配慮があることを知識として得、価値のおき方に変化が生じたと考えられる。

授業で扱ったのは消しゴムであるが、単に消しゴムを選ぶための知識ではなく、そこで獲得した知識がリンゴジュースを選ぶ場面にも活かされていることがわかる。授業において児童にとって身近に感じられる商品を扱い、具体的な場面で商品選択におけ

る基礎的・基本的な知識を取り上げながら、汎用的な知識の習得につなぐことが重要である。

**事前:A**  
Aは果汁が100%でおいしいし、賞味期限が2週間で2リットルを2週間で飲みきれれると思うから。あと、果汁100%という事は果汁の味はみんな好きだともうからです。

↓

**授業:消しゴムB**  
環境によいからと、小さくて持ち運びとカスがまとまり、ごみ箱に捨てやすいからです。大事につかえば、小さくても長持ちできると思ったからです。

↓

**事後:B**  
Bは200円でねだんが安く、2週間後だから、明日すべて飲めなくてもちがう日の3時とかに飲めるから。果汁100%はリンゴの味がしすぎて変だけど20%はほどよいからいいと思った。

図 4-1 値段に対する意識が変化した児童 (A児) の記述

**事前:D**  
果汁と量と賞味期限、原材料名、値段で選びました。果汁100%だととても健康によいから。量は今の冬の時期は、とてもかんそうしているし、みんなよくのむと思ったから。賞味期限は量と同じ理由で早く飲み終わるから。値段はAとくらべるととてもやすいし、果汁100%がとてもいいからです。

↓

**授業:消しゴムB**  
わたしはBの消しゴムを選びます。その理由は、環境に適しているのと、たくさん消せるから。自分の好きな色だから。安くていい。

↓

**事後:C**  
量で200mlで10本で家に来る人数が7~8人で200mlを一人一本あげる。あまったジュースは1か月もつから家族みんな飲めるから。それに紙は環境にやさしいから。

図 4-2 値段に対する意識が変化した児童 (B児) の記述

### ③実践1の成果と課題

実践1からは、商品選択の観点の多様性に児童が気付くことが児童の商品選択に対する思考を変容させる可能性が示唆された。

一方で、学習後の記述式質問紙の記述に、商品選択の観点として示した用語が十分に活かされておらず、観点の用語の定着には課題が残った。実践1では商品選択の観点は児童の意見をもとに教師が黒板に書き示すとどまったが、それでは児童が知識として用語を定着させるには不十分であったと考えられる。そこで使用するワークシートに児童自身が観点を書きこむ欄を新たに設けるよう改善を図った。実践2ではこのワークシートを用い、言葉として観点の用語の定着を図ることとした。図5に示す改善後のワークシートでは、観点の書きこみができるよう、点線で囲んだ「上手な買い物のポイント」欄を追加した。

また、学習前後の記述式質問紙の比較から児童の商品選択の理由を見比べることはできたが、児童がどのような思考過程を経て学習後の商品選択に至ったのかを詳細に把握するには至らなかった。実践2では児童の思考過程の変容に迫るよう、学習前後に実施した記述式質問紙を児童自身に見比べさせ、その思考過程を問う新たな記述式質問紙を設定することとした。

図 5 改善後のワークシート

図 6 考えを比べるワークシート

### (2) 実践2による児童の変容

実践2は学習前後に実施した記述式質問紙を児童に配布し2枚を机上に並べて見比べさせ、児童自身が自分の考え方の変容について記述した質問紙「考えを比べよう」(図6)から児童の変容をとらえた。

児童に自分の考え方を見比べさせるにあたっては、堀(1994)による児童の科学的概念形成に資する児童自身による評価の方法を参考にした。後に、OPPA(One Page Portfolio Assessment)と命名され、OPPAについて、学習者の学習履歴を中心にした評価シートとしている(堀,2010)。その作りは「Ⅰ.単元名タイトル」「Ⅱ.受講前・後の本質的な問い」「Ⅲ.学習履歴」「Ⅳ.自己評価」という4つの要素からなる(堀,2009)。堀(2002)は自己評価について、自分で変容が確認でき学習の意味を自覚できることがきわめて重要であるとし、中島(2017)

は自己評価を概念の形成過程の自覚化つまり、自分がどのように概念や考え方を形成していくのかを自覚することとしている。児童が思考過程を表現しそれを振り返り自己評価することは、概念の形成自体にも効果があると考えられる。本課題において児童のメタ認知を促し、選択の観点を含め商品選択の仕方の理解を促進するために有効であると考え、児童自身が振り返る機会を設定した。OPPAは名称にも示されるように、1枚のシートに事前と事後の考えを記述し見比べる形になっているが、本実践における商品選択の問題場面では、絶対的正解がある問ではないこと、意思決定には選択の観点への重み付けが必要であり、すなわち価値観を問うことになり、比較的短い期間しかあいていない中では、前の記述を目にすることが学習後の考え方に何かしら影響を与える可能性があることを考慮し、あえて学習前と後、振り返り用の記述用紙を分けることとした。

①商品選択の観点が明確になった児童

商品選択の観点が学習前に比べて後の方が明確になったことを書いている児童の記述を表1に示した。なお、4名とも学習前も後もDを選択している。

C児とD児はともに、学習前はこれまでの生活経験から重要だと感じることを理由に商品を選んでいたと考えられる。しかし、学習を通して商品を選ぶ観点として品質、環境、機能、好み、値段の5つを明示し、自身の変化を振り返っている。E児とF児は、「学習前はなんとなく選んでいた」と記述している。これまでの経験から何かしらこだわりを持って選んではいたが、学習によりその観点がはっきりしている。E児は、学習前は値段のことを含みつつも自分では明確な根拠を示せていないと認識していたが、学習後は「値段」という言葉を用い、安くかつ賞味期限は長く、品質について果汁100%ということ

記述できるようになっている。E児の中にあつた「何となく」が学習によって明確に言語化され表現されている。

これらの児童の記述から学習前には漠然としていた商品選択の観点が4時間の学習を終えて明確になり、判断の基準になったといえる。また、このように観点が明らかになったことで「迷わず」書けた者と、今まで意識していなかった観点を含めて考えることにより「迷いました」という、一見相反する児童の記述がみられた。いずれの場合も、漠然としていた観点が明確になることが児童の思考を促進させ、知識の定着を促すことになると考えられる。

②商品選択の観点が変わった児童

商品選択の観点が変わったことを書いている児童の記述を表2に示した。G児は学習前後ともにB、H児とI児は前後ともにDを選択している。

G児は「まず最初に値段」「学習前ではまず最初に値段」と2回値段について言及しているように、学習前は値段が最優先であったと振り返っている。学習後には「まず初めに品質（果汁・原材料名・量・賞味期限）を見ました」とあるように、商品選択の優先順位が変わったことを記している。「学習前と学習後では最初に見る場所が違いました」と自分の思考過程を省察することができている。H児も、学習前は値段のみが選択基準であったことを記し、学習後は「物は値段だけでなく、性質や使いやすさなどが自分にあっているものを買うといい」ことに気付いている。I児の記述は、学習前の方が内容が豊富であるが、自分では「ほとんど同じ」と評価している。G児、H児同様に、「この学習をやる前は、安ければいい」と思っていたが、学習後は「安い方が

表1 商品選択の観点が明確になった児童の記述例

	学習前	学習後	振り返り
C児	青森県産のりんごで果汁が100%で値引きされて200円だったよ。けど賞味期限が明日だった。でも明日飲むからいいよね。おいしくて安いほうがいいから、このリンゴジュースにしたよ。	品質も青森県産りんごで、好みも果汁100%だから。あと値段も値引きされていて安いしCは個々だからごみは出やすいけどDは大きく1個だからごみはあまり出にくいから。	最初のプリントは、自分のこと、友達のことばかり考えていて理由が青森県産りんごで果汁が100%だからと答えていたけど、次にやったプリントでは自分のこと、友達のことだけではなく値段のことや環境のことも理由に入れることができたりしました。つまり、何かものを選ぶときには、品質、環境、機能、好み、値段の5つで決めれば自分に合ったものが見つけれられると思います。
D児	果汁が100%に加え、量も2リットルあり、賞味期限も明日だし、値引きされて200円のリンゴジュースならみんなも安心して飲めるし、みんなに合っていると思ったからです。	果汁100%で機能が良く、量2リットルで目的の1.5リットルにあっていて賞味期限が明日ですが原材料名で品質が良く、値段にもあっているのでDに選びました。	最初に「こんなときどうする？考えてみよう」ととき次の学習を通してのプリントで応えは変わりませんでした。理由が学習で分かった。機能、品質、好み、値段、環境の5つの買い物にとって大事なことについて最初は触れていなかったけれど、次のプリントはそれについての理由が書けたので、最初と考え方が少し変わりました。
E児	ABCは賞味期限がまだ切れないうちで1人で飲むときはいいけど7～8人で飲むし、1日でのめると思いました。あと200円で1番安い。	値段はこれの中で一番安いしBとCはわざわざリンゴジュースをつくるためのりんご、香料、砂糖と買っていかないといけないし、果汁20%だけど、Dは青森県産りんごそのままジュースで売っているし、果汁も100%、砂糖はあまり使っていないのでDにしました。	ぼくは前と今はどちらもDで同じだけれど前は何となくDにしたので選んだ理由はあまり思いつかなかったけどこの学習を終えてちゃんと考えもできたし、僕が買い物などに行くときしっかり値段は低く、賞味期限はできるだけ長く果汁100%などが一番いいかなと思いました。
F児	果汁が100%だし、賞味期限が明日だから250円も値引きされているから。	果汁が100%だし、2リットルも入っているからだよ。青森県産のりんごを使っているからとてもおいしいと思うし、賞味期限が明日だからって200円も値引きされているんだよ。でも明日友達と飲んでいたら明日なくなってしまうからDを選んだんだよ。	学習する前と後ではどちらも「D」で変わらないけど、学習した後はいろいろなことを学んだのでよりおいしく飲めて量が多かったり、値引きされていて安いものを選ぶように考えました。学習する前も安いものの方がいいと思ってDを選んだけど、学習する前は何となく選んでいて、学習した後は安いもののように、量や値段を気にして買おうと思いました。

表 2 商品選択の観点が変化した児童の記述例

	学習前	学習後	振り返り
G児	果汁は別に100%じゃなくてもいいし、賞味期限も2週間先まで飲めてあせらなくてすむのと、ねだんもおてごらだから。	値段も安いし私は甘い方が良いのと2リットルあればいっぱい飲めるから。	わたしは学習前と学習後では変わらず「B」を選びました。学習前と後ではあまり内容は変わらないのですが、学習前は迷わず「B」を選びました。迷わず選んだ理由はまず最初に値段を見ました。値段の安いものが欲しかったからです。次に賞味期限を見ました。賞味期限が2週間なのでゆっくり飲めるからいいと思いました。もし明日と書いてあって「D」が2週間後だったら「D」を選ぶと思います。こうして学習前ではまず最初に値段を見ていました。でも学習後では、悩みました。学習前では値段を見ましたが学習後はまず初めに、品質(果汁・原材料名。量。賞味期限)を見ました。安全に楽しくおいしく飲むためにまず最初に品質を見て最後に値段を見ました。ということは学習前と学習後では最初に見る場所が違いました。
H児	賞味期限が明日だったけど、7～8人くるならのみきるし200円でそれも青森県産りんごだったから。	Cのリンゴジュースと迷ったけど果汁が20%でそれも300円でDより値段が高かったしDは青森県産りんごだけCはりんご・香料・砂糖だったから一番迷ったのはCは賞味期限が1か月後でDは明日だったけど7～8人ならのみきるでしょと思ったからDのリンゴジュースにしました。	学習の前はおもにリンゴジュースの値段のことがばかり考えてA、B、C、Dのどれにするかを考えていたけど学習の後はA、B、C、Dの全体を見通してDに決めました。ここで思ったことは物は値段だけでなく、性質や使いやすさなどが自分に合っているものを買うといいと思いました。食べ物なら値段や量などの全体を見て買うといいと思いました。
I児	AとDにするか迷ったけど、Aのジュースだと果汁、量、賞味期限、原材料名はよいけれど、値段が高くて友達にあげるには450円のものあげなくていいし、Dのジュースは、賞味期限が明日だけ消費期限じゃないから大丈夫。友達には安いのでいい。	友達と明日遊ぶならなくて賞味期限が明日でも消費期限じゃないからちょっとくらいは大丈夫だと思うから。	変わりました。理由は、この学習をやる前は、安ければいいと思っていただけ、この学習を始めてから安い方がお得だけど、品質、機能、好み、値段、環境も大事だと思いました。この学習をやる前のプリントと、この学習をやったのプリントには文章はほとんど同じだけれど、始めの考え方よりは終えた考え方が、おもしろい、お得で生活することができる。

「お得だけど、品質、機能、好み、値段、環境も大事だと思った。」と記しており、値段以外の観点も意識されている。

この3人の児童は、学習前は商品選択の観点が値段に偏っているということが共通している。しかし、学習を通して値段だけではない商品選択の観点があることに気づき、新たな観点を得たといえる。I児は学習を「終えた考えの方が、おいしく、お得で生活することができる。」と綴っており、生活者としての視点に自信をもったことをうかがわせる。商品選択の学習では、選ぶ観点は値段だけではないことを事例(今回は消しゴムを使った授業)を通して具体的に気付かせ、実生活において児童が多面的に考えることができるよう観点を知識として定着させることが重要である。

### ③実践2の成果と課題

実践1の課題を受け本時(消しゴムを選ぶ授業)のワークシートに商品選択の観点を書く欄を設け、共通課題から見いだした商品選択の汎用的な観点を児童自身の知識として確認を図った。

本時の消しゴムを選ぶ記述の評価について、観点への理解度により見取った。授業で示した5つの観点をただ羅列しているだけと判断した児童の記述はB評価(「おおむね満足できる」状況と判断されるもの)とした。A評価(「十分満足できる」状況と判断されるもの)は次のような記述のある児童とした:「ある観点について他の商品と比較して言及している」、「日常の場面を取り出して、ある観点を関連付けて記している」、「自分なりの根拠を示して、観点

について言及している」、「欠点となる観点も記し、それを上回る観点について記している」、「ある観点の中でも、複数のことを書いている」。

ワークシートを改善した結果、児童が観点を振り返りやすくなり、記述には観点として示した用語が多く用いられた。すべての児童がAまたはBの評価となった。児童が観点を意識して商品選択することにつながったと考えられる。しかし、約6割の児童はB評価の用語の羅列にとどまった。今後は、観点をいかに使って思考したらよいかや、児童自身が考えた過程をわかりやすくたどることができるようにすることなど、すべての児童が深く理解できる指導方法を検討することが課題である。

本時で行った消しゴムを選ぶ課題に対するワークシートの記述は、パフォーマンス課題といえる。松下(2007)はパフォーマンス課題によって学力は観察可能なパフォーマンスへと可視化され、そのパフォーマンスが解法のタイプとルーブリックというツールを使って解釈・評価されるプロセスをたどって、固有名をもった個々の子どもの学力の質を把握できるようになるとしている。商品選択に対する児童の能力を評価するためにも、本時の記述に対する解法のタイプの分析と対応するルーブリックの開発が必要である。

リンゴジュースを選ぶ記述式質問紙「こんなときどうする?」を学習前後に実施したが、それら2枚だけを見比べるとI児は、一貫して値段に重きをおいて商品を選択していることが読み取れる。しかし、思考過程を児童自身に問うた「考え方を比べよう」をあわせて読むと、学習後には、値段は大事だけれ

ど、それだけではない品質、機能、好み、環境のことも考えていたということがわかる。このように、「考え方を比べよう」を記述することで、児童の思考過程が児童の言葉で綴られる。まさに、学習したことが可視化され、先述の堀（2002）や中島（2017）の指摘のように、児童自身にとっても自分は何がわかるようになったのか、新たに獲得した事項を把握する機会になっている。

## 5 まとめ

児童は消費に関する知識は日常生活の中で獲得していると思いがちである。本実践では、それらにゆさぶりをかけ知識を強化・補強して汎用的知識とし、実生活に活用できるようにすることを意図した授業を行った。商品選択の観点の抽出では、児童自身が実感しながら考えられるような教材として消しゴムを取り上げた。

日常生活において日々商品購入が行われている。同じ商品を購入する場合でも、その時々状況に応じ、多様な観点の中から自分に必要な商品を選択しており、絶対的な正解はない。ある商品の選択の観点を学習しても、常に同じ観点で商品を選択できるとは限らず、状況に応じて多様な観点をもとに自分なりに必要な観点や求める品質のレベルを考える思考の柔軟性が必要となる。小学校家庭科の消費者教育では、商品選択の多様な観点を汎用的な知識として獲得するとともに、どの観点を重視して選択するかという自己の価値観との関わりについて理解することができる学習にする必要がある。

実践1では、授業を通した児童の消費に対する意識と知識の変容を読み取った。商品選択の観点多様性に児童が気付くことが児童の思考を変容させる一因となることが明らかとなった。一方で観点の用語の定着には課題が残った。そこで、実践2に向けてワークシートに用語を明確に記す欄を新たに設ける改善を図った。

実践2では、学習内容を汎用的に活かす場面として別の商品選択（リンゴジュース）を行う記述式質問紙「こんなとき、どうする？」を学習前後に行うとともに、2つの記述を児童自身が見比べ変化を見取る「考え方を比べよう」を行い、児童の思考過程を読み取った。学習により、商品選択で何を比べているのか観点が明確になり、学習前に比べ商品選択の観点が広がり、選択結果を変化させる場合もあることが明らかとなった。さらに、児童が思考過程をメタ認知することは学習した概念を再確認することを促し、概念の形成に効果があることが示唆された。

実践2を通じて、学習前後の「こんなときどうする？」だけでは、必ずしも児童の思考過程を読み取ることができないことがわかった。児童自身による学習を通した商品選択の変化の見取りである「考え方を比べよう」には、商品選択結果を記述した「こんなときどうする？」には示されていない概念形成の過程が綴られることが少なくなかった。児童自身による思考過程の振り返りの機会は教師が児童の思考の変化を把握するために有効

ではあるが、以前に回収した2枚の用紙を再度配布し児童に見比べさせ、別の用紙に記述させることは時間的にも負担が大きい。今回のような、事前の回答の影響があるかもしれない課題の場合にも、授業で活用しやすく、児童の深い思考過程が明らかとなるようなワークシート等の工夫が必要である。

本稿は、「第13回金融教育に関する小論文・実践報告コンクール（2016年）」（主催者：金融広報中央委員会）の実践報告部門 奨励賞受賞作品（山下綾子）に、改善を加えた授業を行い大幅に加筆したものである。

## 【注】

- 1) 賞味期限は開封するまでの期限を示すものであるが、説明が不十分であったため、児童の中には開封後も有効と考えていた者がみられた。

## 【引用・参考文献】

- 堀哲夫（1994）『理科教育学とは何か 子どもの科学的概念の形成と理解研究を中心にして』東洋館出版社
- 堀哲夫（2002）「理科」田中耕治編著『新しい教育評価の理論と方法〔II〕教科総合学習編』日本標準，pp. 159-209
- 堀哲夫（2009）「認知過程の外化と内化を生かしたメタ認知の育成に関する研究—その1」『山梨大学教育人間科学部紀要』11 pp. 12-22
- 堀哲夫（2010）『授業と評価をデザインする 理科』日本標準
- 松下佳代（2007）「パフォーマンス評価による学びの可視化」秋田喜代美・藤江康彦編『はじめての質的研究法』東京図書，pp. 275-295
- 中島雅子（2017）『自己評価』による授業改善—小学校理科におけるOPPAを活用した事例を中心として—『埼玉大学紀要教育学部』66（1），pp. 65-75
- 埼玉県教育委員会（2010）「家庭」『小学校教育課程指導資料』pp. 142-143
- 埼玉県教育委員会（2011）「家庭」『小学校教育課程評価資料』pp. 156-157
- 重川純子・山下綾子（2017）「環境配慮行動への動機づけを高める「消費生活と環境」の学習」『埼玉大学教育実践センター紀要』16，pp. 67-72
- 山下綾子・河村美穂（2014）「調理実習のための買物体験の効果—小学校6年生での授業実践より—」『埼玉大学教育実践センター紀要』13，pp. 17-23